

「消化器超音波診断学」

千葉大学助教授 大 藤 正 雄 編著

名古屋市立大学教授

武 内 俊 彦

腹部超音波検査が消化器疾患を診療していくうえで欠くことのできない極めて有用な検査になっていることは、今更言うまでもない。本検査については既に多数の著書が出版されているが、今回千葉大学第1内科の大藤正雄先生の一門が医学書院より「消化器超音波診断学」を出版された。著者らは以前同じ医学書院から「経皮的胆道造影」の名著を出されたが、本書も明らかにその延長上にあると言える。この2つを重ね読むと肝、胆、膵を中心とする形態診断学の歴史はもとより、超音波検査の現時点における位置づけを知ることができる。また、既存の著書や報告とやや趣きを異にして、超音波に

よる画像診断のみでなく、著者らが開発した、日常診療で有用性の高い穿刺造影、生検、細胞診、胆汁や膿瘍のドレナージなど超音波映像下腹部穿刺法が述べられている。また、画像診断に関しても各種の計測値、超音波所見の特徴などがわかりやすくまとめられている。

本書は文章や目次項目が簡潔で、解剖図譜を多く取り入れ、画像と並んでそのシェーマが加えられ、更に症例によっては病理肉眼像、組織像が添えられており、大変読みやすく、理解しやすい。肝、胆、膵を中心とはしているが、「消化器」と銘うってあるように消化管、腎、腹膜・腹腔病変の診断にも言及してい

る。臨床で腹痛1つを取り上げても、消化器に限らずすべての病態を正しく把握することは極めて大切で、そういった配慮が感じられる。解剖図譜についても同じことが言える。超音波による画像は他の検査とは異なる画像であり、ふと解剖図譜が見たくなる。行き届いた心配りである。文献の引用も多く、特に著者ら自身の多数の文献が呈示され、この分野における牽引者ぶりがうかがわれる。この本は超音波のすばらしさを次々に見せてくれる。ただ、本検査でも高齢者、急性腹症の診断など問題がないわけではない。

いずれにしても、本書が優れた診断学書であることは一瞥しただけで明らかである。本書の刊行に惜しみない拍手を送ると共に、臨床研修医はもちろん、消化器病の診療に当たるものは是非一読していただきたいし、常に手元においてほしい好著である。

B5判 372頁 図96 写真690 1985

¥13,000 ㊦400

医学書院 刊